雨女はわりにあわない

千紘リカ

あらすじ

私は雨女だ。そのせいで、これまでどれほど割を食ってきたことか。いい加減雨女を卒業したいと思っている。雨女ほどわりにあわないものはない。そんな私の前に現れたのは、雨男だった。

文字数　4,733

私は雨女だ。

屋外で行われるたとえばバーベキューパーティーのようなイベントの最中に急に雨が降ってきて「ごめんなさい。あたし、雨女なんですよぉ」と甘えた声でのたまって周囲の男子たちの注目を集めようとするえせ雨女なんかでは断じてなく、正真正銘の雨女だ。

本日の降水確率五十パーセント。それって降るの？　降らないの？　私はあえて傘を持たずに一人暮らしのアパートの部屋を出た。こんな時ママがいたら、きっと云うだろう。

「沙希、折りたたみ傘くらい持って行きなさい。世界中が晴天でもあなたの廻りだけは降るんだから」

それでも私が傘を持たずに出たのはいい加減雨女を卒業したいと切望していたからだ。雨女ほどわりにあわないものはない。卒業という言葉が適切かどうかはわからないし、こんなことくらいで雨女と縁が切れるかはわからないのだけど。

一日いい天気が続いた。夕方、定時に会社を出た私は雲一つない空を見上げて思わず腰のあたりで右手の拳を強く握った。ところが電車が自宅最寄りの駅に近づくにつれ真っ黒な雲が空を覆い始め、駅に着いた時には土砂降りになっていた。

私の雨女歴は長い。小学生時代の六年間、遠足や運動会といったイベントのた

びに雨に見舞われた。何年生の時だったか、クラスの男子の誰かが私の苗字の『雨宮』に引っ掛けて雨女とふざけて呼んだのが最初だったと思う。

私が雨女であることを確信したのは高校の修学旅行の時だ。私は修学旅行に行かなかった。ていうか、行けなかった。パパが急死したのだ。通夜と翌日の告別式、そして火葬場でパパが荼毘に付されるまでの間、雨はしとしとと降り続けた。

「パパらしいわね」

と、ママが泣き笑いをしたので私も思わずもらい泣きをした。そう、私の雨女は雨男のパパから譲り受けたものだ。ちなみにクラスメートたちが行った修学旅行先は連日の好天だったという。

大学に進学しても私の雨女は健在だった。二年生になったばかりの春、同学年の杉村君に突然コクられた。

「ずっと雨宮のことが好きだった」

杉村君は物腰が柔らかく誰からも好かれるタイプの男子だった。

杉村君とのつき合いが始まると、私の中の雨女はここぞというタイミング――つまり、それは絶対に降ってほしくない時という意味だが――では必ず雨を降らせた。極めつけは杉村君が楽しみにしていた屋外フェスだ。始まる前から小雨がパラパラと降っていた。それが中盤にさしかかる頃にはゴロゴロと雷が鳴り始め、

主催者側は突然の中止を決めた。

　恨めしそうに空を見上げている杉村君に私は云った。

「いつもごめん」

「なんで沙希が謝るの。僕は雨女と承知で沙希とつき合っているんだからね。こうなることは織り込み済みだよ」

　と、杉村君は無理に作ったような笑みを浮かべてそう云い、

「それに雨、つまり水は生命の源だよ。僕たちの体だって半分以上は水分でできてるんだからね」

　いまいちよくわからない理屈ではあるけれど、杉村君らしいやさしさに触れた気がして、私はちょっと幸せな気分になった。

　そんな杉村君の態度が一変したのは三年の夏休みに入る直前のことだ。

「沙希のことは好きだよ。それは今もこれからも一ミリも変わらないことだよ。けどね、将来のこととか考えているうちにだんだん不安になってきたんだ。たとえば、この先僕たち、結婚するとするよね。そのうちに子どもが生まれる。やがてその子が幼稚園や小学校に通うようになる。当然、運動会だとか遠足だとかがあるよね。そういう行事が軒並み中止になりはしないかってね」

　杉村君が二学年下のコとつき合ってると知ったのは夏休みが明けてすぐのことだ。

社会人になると私の雨女ぶりはいよいよ本格化した。就職した先は農機具を販売する会社だ。入社二年目には私が雨女であることは社内ではちょっとした噂になっていた。七月中旬のある日、私は稲作課の河野課長に付いて稲作農家さんのお宅へ出向くことになった。その年は空梅雨でもうひと月近く雨が降っていなかった。ところが、その日に限ってまとまった雨となり、干上がっていた田んぼは一面雨水で満たされた。農家さんはたいそう喜んでくれて新型の農機具を購入してくれることになった。帰りに居酒屋で課長と二人で祝杯を挙げた。課長は私の雨女ぶりを称え、私は入社以来初めて会社に貢献できたことが心底嬉しく、二人だけの宴は大いに盛り上がった。

「おいおい、雨宮、まだ降らせるつもりか」

店を出るとひどい土砂降りになっていた。

河野課長は私の肩を抱き耳元で囁いた。

「当分止みそうもない。少し休んで行こうか」

その後も私は河野課長に同行して稲作農家さんを廻り雨を降らせては歓迎され、帰りにホテルで課長とセックスをした。課長には奥さんも子どももいる。これが世にいう不倫というやつなんだ、と気づいた時にはもう私は河野課長のことが大好きになっていた。

もっとも、そんなことが長く続くはずがなかった。そんなことというのは私の雨女としての力量のことだ。

「さっぱり降らねえじゃないか」

「なにが雨女だよ」

と、行く先々で怒号の嵐。いやいやいや、それって私のせいなの？　降っても晴れても嫌味を云われるのが雨女の宿命なのだ。だから、雨女はわりにあわない。ほどなくして河野課長との関係も終わった。奥さんにバレたのだ。

『sunny side』は私のお気に入りのバーだ。週に一度か二度会社帰りに立ち寄り、バーテンダーの須藤さんお勧めのカクテルを飲む。特に職場やその他の人間関係でモヤッとした時なんかは、そのモヤモヤを直接自宅へ持ち帰らなくて済む。そう、『sunny side』は私にとってろ過装置のような場所だ。

この店に通うようになったのは店名にひかれたせいだ。日の当たる側とでも訳せばいいのだろうか。バーの店名にはおよそ似つかわしくない名だが、とにかく雨女を克服するのにこれほどぴったりの名前はない、と直感的に思ったのだ。以前、店名の由来を須藤さんに尋ねたことがあるが、名付けの親は亡くなった元のオーナーで、店名も含めて居ぬきで始めた須藤さんにもよくわからないとのことだった。ちなみに須藤さんによれば、後ろに up を付けると英語では目玉焼きのこ

とをいうらしい。黄身を太陽に見立ててそう呼んだらしいから、私の直感も当たらずとも遠からずということにはなる。

ここへは必ず一人で来て一人で飲む。この店のことは誰にも話していない。会社の同僚にも大親友のみづきにもだ。須藤さんとは軽く挨拶を交わすくらいだし、常連さんたちと仲良くなることもしない。お勧めのカクテルをゆっくりと味わいながら体の中に溜まった不純物が分解されていくのをひたすら待つ。それが私のこの店でのスタイルだ。

だが、今夜は違った。二杯目を飲み終えた時だった。

「ここ、いいですか？」

スーツを上品に着こなした背の高い男の人（イケメン）が私の傍らに立っていた。私が少し怪訝な顔をすると、彼は上着のポケットから USB メモリーを取り出してカウンターの上に置いた。それには見覚えがあった。先週店に来た時、床に落ちているのを見つけて須藤さんに預けたものだ。

「お礼に一杯奢らせてください」

彼は真行寺亘と名乗った。真行寺さんは私より五コ上。ＩＴ関連の会社を経営しているそうだ。USB メモリーには会社の重要な情報が入っていて、命より大切なものなんだと云って、何度も私に礼を云った。

そして、四杯目をひとくち口に含んだ時だ。

「私、実は雨女なんです」

「はい？」

　真行寺さんは不思議そうな表情で私の顔を覗き込んだ。そりゃそうだ。初対面の相手に対してナニ云ってんだろ、私。てか、それ云う必要ある？　少し飲み過ぎたせいかもしれない。アルコールは強い方ではない。いやいや、そういうことじゃないだろ、私。まだそこまで飲んではいない。じゃあ、ナニ？　もしかして、イケメンに喧嘩売ってる？　いや、喧嘩というより警戒心。たぶん、そうだ。私ごとき雨女がイケメンに対峙することで、勝手に自己防衛本能のスイッチが入ったのだ。え、そうなの？

「実は僕も雨男なんだ」

　真行寺さんは照れ臭そうな笑みを浮かべてそう云った。

　なんという神対応！　あんなに混乱していた私の頭の中がそのひと言で水を打ったように静かになった。

　それからは二人で終電ギリギリまで雨にまつわる体験談を語り合った。彼もまた私に負けず劣らずなかなかの雨男だった。

　そして、最後に真行寺さんは云った。

「だから、雨男はわりにあわない」

今日は真行寺さんとの初デート。私は例によって見事なまでの雨女ぶりを発揮した。というより、雨男の真行寺さんとの相乗効果で、それはもう雨というより嵐だった。私たちは猛烈な風雨の中、傘を差し最寄りの駅へ向かっていた。

「あっ」

私が手にした傘が宙に舞った。真行寺さんがさっと自分の傘を私に差しかけてくれた。だが、次の瞬間、その傘もいとも簡単に飛ばされた。私たちは全身ずぶ濡れになりながら、空のかなり高いところで乱舞する二本の傘をしばらく眺めていた。そして、二人で大笑いした。やがて、笑い疲れると真行寺さんが私を強く抱き寄せた。

「沙希……沙希……」

真行寺さんが私を呼ぶ声で目が覚めた。週末の度に真行寺さんと一緒に過ごすようになっていた。今日は朝からしとしとと雨が降り続いていて、二人とも出かける気にもなれず私の部屋でまったりと過ごしていた。夕方近くになって私は眠ってしまったらしい。

「沙希、早く」

真行寺さんはベランダにいて、私に向かって手招きをしている。

ベランダに出ると、虹が出ていた。虹は東の空から南の空にかけてきれいな半

円を描いていた。こんなにくっきりとした虹を見たのは初めてだった。私は真行寺さんとベランダに並んで立ち、やがてその輪郭が空に溶けて完全に消えるまで虹を見ていた。

「少しお金を貸してもらえると助かる」

　真行寺さんが切羽詰まった様子で電話をかけてきたのは週明け、ちょうど会社の昼休みの時間だった。得意先への支払期日を一週間勘違いしていて、すぐに現金が必要なんだという。

「いくら必要なの？」

　私はきいた。

「あと三十万。いや、十五万でいい。何とかならないかな」

　私は昼食を途中で済ませると、近所のコンビニのＡＴＭに走り、三十万おろした。たぶん三十万ぽっちじゃぜんぜん足りないはずだ。だが、それが今の私に出せる精一杯の金額だった。私は近くまできていた真行寺さんにお金の入った封筒を手渡した。

「それ、詐欺だから」

　と、みづきは云った。お金を渡した直後から真行寺さんと連絡が取れなくなっ

ていたのだ。今日でもう一週間。

「で、いくら渡したの？」

「……十五万」

　私はとっさにウソをついた。

「そっかぁ。まぁ、高くついちゃったけど、勉強代だと思いな」

　そう云ってみづきはニッコリと笑った。どれほどネガティブなことでもポジティブに変換してしまう力がみづきにはある。これまでどれだけみづきの言葉に救われたことか。

　ひと月あまりがたった。真行寺さんとは依然連絡が取れないままだ。急な病気になったんじゃないか。事故にでも巻き込まれたんじゃないだろうか。そんなかすかな期待は泡となって消えていた。正直、三十万は痛かった。だけど、真行寺さんに対する怒りの感情は不思議と湧いてこなかった。むしろ、今回のことで自分のダメ人間ぶりを改めて実感しただけだった。しかも、私はそれをこれまでずっと私の中の雨女のせいにしてきたのだ。だが、雨女に罪はない。それどころか雨女はあの嵐の中での抱擁やアパートのベランダで真行寺さんと並んで見た虹を私にもたらしてくれたのだ。

　今日はみづきの結婚式だ。大切な大切な大親友。みづきには幸せになってもら

いたいと心の底から思っている。アパートを出て駅へと向かい歩き出すと、パラパラと雨が落ちてきた。